厚生労働科学研究費補助金 エイズ対策研究事業
男性同性間のHIV感染対策とその介入効果に関する研究

大阪地域における男性同性間のHIV感染予防介入研究

研究分担者：鬼塚哲郎（MASH大阪／京都産業大学）
研究協力者：山田創平（MASH大阪／京都精華大学）、辻宏幸、後藤大輔（MASH大阪／財団法人エイズ予防財団）、内田優、町登志雄、中村祐子、鍵田いずみ、原澤俊也、祝雄一、大畑泰次郎（MASH大阪）、木村博和（横浜市健康福祉局）、金子典代、大森佐知子（名古屋市立大学看護学部）、コーナ・ジェーン、塩野徳史（名古屋市立大学看護学部／財団法人エイズ予防財団）、日高庸晴（関西看護医療大学）、市川誠一（名古屋市立大学看護学部）

研究要旨

平成21年度、MASH大阪は以下のような研究事業を実施した：

１．以下の介入プログラムを執行した：

１）コミュニティレベルのプログラムとして、月刊のコミュニティペーパー＜SaL+＞の発行を継続して行った。本年度より編集方針を転換し、これまでのエイズ予防/セクシュアルヘルス関連情報をコミュニティ情報でくるんで提示する方式を止め、エイズ予防/セクシュアルヘルス関連情報を前面に押し出す方式を採用した。平成21年4月～22年1月の期間に、月平均186店舗および38団体に21名のボランティアが6600部を配布した。

２）グループ・個人レベルのプログラムとして：①ドロップインセンター＜dista＞関連事業を執行した。平成21年4月～22年2月の期間に、月平均822名が来場、うち初来場者は月平均83.7名、期間全体で921名であった。いずれも前年比で微増。16種のカフェイベント、5種の教室、4種の展覧会が開催され、相談件数は225件であった。スタッフ研修プログラムが大幅に充実し、6月以降毎月開催、参加者は6～17名であった。②STI勉強会＜Café Chat＞を執行した。毎月趣向を変え、工夫を凝らして開催し、参加者は6名～54名であった。③若年層ネットワーク構築支援プログラム＜Step＞を4月、6月、7月、8月に開催、総計117名が参加、うち99名がドロップインセンター＜dista＞を利用した。④ハッテン場におけるセーファーセックス促進環境整備プログラム＜ハッテン場プロジェクト～β～＞（商業系ハッテン場等でのコンドーム普及100％作戦）を執行した。前年度に19の商業施設を対象に実施した予備調査の結果をふまえ、本年度は15の施設に対し総計58,800パックの啓発資材（コンドーム、ローション、啓発情報）を短期間に集中して配布した。

２．上記介入プログラムの効果評価ツールとして、平成19年度に引き続きゲイバー顧客層を対象とした質問紙調査（バー精密調査）を実施した（別稿参照）。

３．大阪府エイズ対策基本方針の改訂作業に協力した（大阪府健康医療部保健医療室地域保健感染症課との協働）。

A. 研究目的

本研究の目的は、平成21年度に執行された研究事業を記述・分析し、効果評価と照合することで、個別施策層向け予防介入事業のモ

デル構築を試みるところにある。

B.研究対象と方法

本研究の対象は平成21年度（2009年度）にMASH大阪によって執行された予防介入プログラムであり、後述する効果評価の結果と比較検討したうえで考察を加える。比較検討、考察にあたっては、疫学とその周辺領域のみならず、組織論、ソーシャルマーケティング理論、社会学といった広い領域からの言及を行うこととする。

C.研究結果

各プログラムの執行状況について順次報告する。

①コミュニティペーパー＜SaL+＞の配布

（これまでの流れ）

2000ー2002年度に開催された臨時検査イベントSWITCHを通して得られた情報をコミュニティに還元するためのツールとして構想された＜SaL+＞は、2003年度に入りコミュニティペーパー的性格を強めながらコミュニティに浸透してゆき、2004年度実施したフォローアップ調査の結果、関連知識、受検行動、予防行動のいずれにおいても、受取り群には非受取り群と比較して有意な効果がもたらされたことが示唆された。

（目的）

・MASH大阪が把握している情報をコミュニティに還元する。
・配布活動を通じて、コミュニティとのネットワークを構築する。
・地域に密着した情報を発信し共有化をはかることで、コミュニティへの帰属意識を涵養する。

（成果）

今年度の配布実績は（12月末までの時点で)毎月平均186店舗と38団体に20名のボランティアスタッフが約6700部を配布した(9月はPLuS+の広報とあわせて行ったので除外している）。9月はPLuS+にあわせて1000部増刷した【付表1】。

年間を通して発行部数のほとんどは、ゲイタウンや地域団体への配布であるが、夏ー秋にかけては大型のイベント会場等でも配布した。

今年度も配布枚数・活動は順調に推移しコミュニティペーパーとして確実に地域に定着したことをうけ、「コミュニティ関連情報」よりも「セクシュアルヘルス関連情報」を前面に打ち出す方向転換を行った。具体的には、１）特集記事において、エンタテイメント性を保ちつつエイズ予防/セクシュアルヘルス関連のテーマを取り上げた、２）医師、MSW、検査技師等、専門職者のインタビュー記事を掲載した、の２点である。

②ドロップインセンター＜dista＞

（目的）

大阪地域のゲイ男性が利用する商業施設が多い地域に啓発普及の活動拠点を整備・運営し､HIV/STI感染予防に向けた啓発プログラムを戦略的に展開することを事業の目的とする。ドロップインセンターの機能は以下のとおり。

〇予防啓発事業の拠点機能として
・啓発活動およびアウトリーチのベース基地（啓発の実施・普及機能）
・予防啓発に関わるスキル研修会・講習会会場（人材育成機能）
・セーファーセックス勉強会やワークショップ会場（啓発普及機能）

〇情報センター機能として
・コミュニティの人がふらっと自由に立ち寄れて、セクシュアルヘルスに必要な情報やコミュニティの情報を持ち帰ることができる（情報の還元・普及機能）
・相談場所・窓口（相談機能）

○コミュニティセンター機能として

・コミュニティ交流プログラム会場（地域交流機能）

・コミュニティからのリアクションをフィードバックさせる（情報収集機能）

・リピーターを獲得し、その人達と相互に確実な情報伝達をくりかえすことによって、コミュニティ内のキーパーソンの育成をはかる。

（対象クライアント）

対象クライアントとして以下を想定した。

1.ゲイ関連施設従業員

2.ゲイ関連施設利用者

3.インターネット利用者

4.エイズ対策関連団体／個人

（成果目標）

成果目標として以下を想定した。

・当事者性を重視した予防啓発活動を、コミュニティの中心エリアで実施し、コミュニティメンバーや関係機関との連携・協働により、セクシュアルヘルスの増進、セーファーセックスへの環境づくりを目指す。

・＜dista＞を核としたコミュニティ・ネットワークを構築し、そのネットワークを通じてHIV/STIの予防や共生のメッセージと正しい情報が伝わってゆくことを目指す。

・情報と空間・時間を共有し、HIVを身近に感じる人が増えていくことで、HIV/AIDSの予防と共生の意識がコミュニティ全体に広がり、行動変容を促すことを目指す。

（運営体制）

2009年度は基本オープン時間を水曜日～月曜日の17時ー23時とし、火曜日を休館日とした。土曜日には不定期でイベントを開催しその際はオープン時間を17時ー5時とした。17時ー20時をAシフト、2時ー23時をBシフト、及びイベント開催時の土曜日の23時ー5時をCシフトとして、運営スタッフとコンシェルジュ（ボランティア・スタッフ）がシフトを組んで＜dista＞運営業務に当たった。コンシェルジュは現在10名が稼働している。

今年度は、より相談機能の強化をめざし、毎月第２日曜日に運営スタッフとボランティアスタッフを対象とした研修を行った。

（成果）

土曜のイベント実施を若干減らしたため施設オープン時間は月平均 184 時間に減少した。しかし来場者数は月平均 820 名程度あり、前年度よりやや増加した。そのうち初来場者についても、月平均 84 名程度あり、これについても前年度より増加した。初来場者数は全体の約 1 割であった。＜dista＞利用状況及び利用者数年度別推移は【付表 2】【付表 3】のとおり。

今年度に開催したカフェイベントと教室の実施内容および展覧会内容は【付表4】【付表5】のとおり。

相談件数は月平均 22 件程度あった。その推移と相談内容は【付表 6】及び【付表 7】とのとおり。

また相談体制の強化をめざし、「コミュニティセンターにおける対人支援」について理解し、利用者に適切な支援をするために必要な基礎知識と技術を習得することを目的としたスタッフ研修プログラムを月1回実施した。実施内容は【付表8】のとおり。これにより相談を受けた際のリソース先がより明確に共有された。

またふらっと来た来場者のうち特に初来場者については、コンシェルジュが積極的にコミュニケーションをとる方針を徹底させたことにより、予防や検査情報を確実に提供できるようになった。

③STI勉強会

（目的）

CAFÉ CHATとはエロネタや恋愛ネタを中

心に身近で興味をひくようなテーマを設定し、一義的な展開や啓発色の強いメッセージを発信するのではなく、自らの言葉で意見、情報を交換し、多様な性や生活のあり方を認め合いその雰囲気を共有するものである。自分達にとってのSEXを考え、語ることにより、SEXに対する興味や意識を喚起し、SEXと密接な関係にある性感染症に対する認識を促すことを目的とする。

また、SEXの話題の中にセーファーセックスに関する情報を盛り込んだり、プログラムの最後にSTIやセーファーセックスに関連する情報を提供するミニ勉強会を設けることにより、STIやセーファーセックスに対する知識向上と共に予防と共生の意識を浸透させることを目指すプログラムである。

（手法）

手法として以下の点を挙げることができる。

・ファシリテーターを設け対話形式での展開を行う。参加者が楽しんで取り組めるようテーマに沿った資材やゲーム等を使用。

・CAFÉ CHATを問題なく円滑に進行させるためグランドルールを設ける。

・参加者が意見を発し、取り組みやすいような場所や雰囲気を設定する（カフェ形式etc）。

・プログラム最後15分程度のSTI勉強会や、SEXの話題の中にセーファーセックスを意識するような仕掛けを設ける。特に必要な情報として「感染症/経路/症状/対応/検査」「セーファーセックス/行為」「コンドーム/セックスの道具/使い方/入手方法」を盛り込むこととした。

今年度は、毎月第2土曜日の夜間20時～22時に意見交換と15分程度の勉強会を実施。対話や相談等の場となることに留意した。また、10月度ではPLuS+2009での展示パビリオンとして参加し、毎月使用している＜dista＞外の場所での対話や対話を醸成する企画を実施した。

広報として＜SaL+＞や＜dista.b＞での告知、mixi等を用いた。

（成果）

エロネタや恋愛ネタなどの身近なテーマ設定は参加者の興味をひき、参加者自身の積極的な発言を促すことができた。また、情報を持ち帰ってもらったり、実生活に役立つ情報を共有することの有意性が感じられた。

15分程度のミニ勉強会や対話の中でセーファーセックスを意識するための仕掛けを設けることで、必要な情報を的確に伝えやすく、参加者への意識づけが可能な機会となった。

スタッフ自身にとっても身近なテーマを扱い運営することで、企画の立案や情報の伝達の方法、ファシリテーション技術の取得に関して向上が見られた。

コミュニティスペース＜dista＞や少人数に対する運営は成功したが、今後新規クライアントの獲得を目指す場合の広報の手法や、運営方法の見直しが必要であると思われる。

プラグラム実施状況は【付表9】のとおり。

④若年層ネットワーク構築支援プログラム＜step＞

（目的）

コミュニティにあまりアクセスしていない10代ー20代の若者をターゲットとしたプログラムである。プログラムの目的として以下の点が考慮されている。

・コミュニティや、MASH大阪に未接触の若者に対する入り口となる事

・参加者が＜dista＞へアクセスするようになる事

・他のプログラムへのボランティア・リク

ルートになる事

（方法）

事業は以下の点に留意しつつ展開した。

・啓発色をださず、季節感やお得感、遊びに行く、楽しむ、友達作りなどの企画を実施。

・コミュニティスペース＜dista＞へアクセスするきっかけを提供する。

・mixi（大手のSNS＝ソーシャルネットワーキングサイト）を中心とした広報宣伝を行う。

・プログラムに関わるスタッフの友人の中であまりSTIの情報に触れていないクライアントの参加を促進させる。

・企画運営実行は主にコミュニティの若者が中心に行う。

（成果）

今年度は 4 回の企画を実施し、合計 117 名の参加があった。実施内容は【付表 10】のとおり。運営スタッフのマンパワー不足により昨年よりも企画数が縮小したため、参加者数は昨年度の半分程度にとどまった。

企画に＜dista＞へのアクセスを盛り込むことで、新規参加者の約 9 割が＜dista＞を知り、必要なときに＜dista＞を利用するようになった。

また＜step＞参加者のうち7名がSaL+のアウトリーチにも参加した。また 10 名がPLuS+にボランティアとして参加し、ボランティアリーダーなど中心的な役割を果たす者もいた。

このように本プログラムは、MASH 大阪が実施する多くのプログラムに関わるボランティアスタッフを獲得する重要なプログラムとなっている。step から MASH 大阪が提供する他のプログラムへの接触状況は【付表 11】のとおり。またこれまでコミュニティと関わる機会が無かった人が、step を入り口としてゲイ・バイセクシュアル男性向けの施設やイベント等に出向くようになる等、コミュニティとの関わりを持つようになり、予防情報に触れる機会の向上に寄与している。

⑤ハッテン場におけるセーファーセックス促進環境整備プログラム＜ハッテン場プロジェクト～β～＞（商業系ハッテン場等でのコンドーム普及100％作戦）

（目的）

このプロジェクトは、関西圏の商業系ハッテン場において、利用者に対して十分な量のコンドーム及びローションが、セックスが行われる場所からなるべく手の届く範囲において提供されるための環境を構築するために実施される。

商業系ハッテン場は、不特定多数の MSM がセックスすることを目的として集まる場所であることから、MSM のセクシュアル・ネットワークにおいて、中心性が強い空間であるといえる。実際にセックスを行なう空間であり、かつ会話などのコミュニケーションなしにセックスが成立する空間であるため、セーファーセックスに関するネゴシエーションを事前に行いにくい。そのため、この空間におけるセーファーセックスの実践は「利用者個々人の意識・態度」ならびに「施設の雰囲気・環境」に大きく左右される。

そこで本プログラムにおいては「施設の雰囲気・環境についての介入」を試みる。

京阪神圏の商業系ハッテン場において、利用者がセックスを行なうのに十分な量のコンドームとローションが、セックスが行われる場所からなるべく手の届く範囲において提供される環境を、施設と十分に協議しながら構築する。

そして、利用者に対して安定的に継続してコンドームとローションが提供された場合のコンドーム使用率など、行動変容の推移を測定する。

（方法）

このプログラムでは、関西圏の商業系ハッテン場の現地観察調査、オーナー・店長へのインタビュー調査（質問紙調査含む）、施設利用者へのインタビュー調査、利用者への質問紙調査、コンドームとローションの提供プログラムを組み合わせて実施し、関西圏の商業系ハッテン場において、コンドーム及びローションが利用者に対して十分な量で無償提供されるための環境を構築し、それに伴って利用者の感染予防行動がどのように変容するかを調査する。

（事業の成果）

昨年度 1 月から～2 月に「ハッテン場オーナー・店長へのヒアリング」を実施し、施設規模・利用者人数・コンドームとローションの無償提供の意思と実態、またそのための問題点について把握した。これに基づいてコンドーム＆ローション供給プログラムを計画し本年度 8 月～10 月に実施した。その結果、15 店舗に 3 ヶ月で合計約 60000 個のコンドームキット（コンドーム 1 個・ローション 1 包・セーファーセックスガイドなどが入っている）を供給した。コンドーム＆ローション供給プログラムの実施状況については【付表 12】のとおり。

供給プログラム終了後 12 月に再びハッテン場オーナー・店長へのヒアリング」を実施し、計画の修正を行ったのち 2 月～3 月に再度供給プログラムを実施予定である。

（ハッテン場利用者のコンドーム使用に関する質的研究）

また昨年度 1 月から～2 月にハッテン場利用者に対してインタビュー調査を実施し、ハッテン場でのコンドーム利用に関してデータを得た。調査時期の関係から昨年度の報告書には未収録のため本報告書に採録する。

【研究目的】本研究は MASH 大阪がハッテン場において、より効果的な HIV 感染対策プログラムを展開するために実施した。とりわけハッテン場におけるコンドーム使用に関する規範を探ることでコンドーム使用の阻害要因を明らかにし、それにより「ハッテン場におけるセーファーセックス促進環境整備プログラム＜ハッテン場プロジェクト～β～＞（商業系ハッテン場等でのコンドーム普及 100％作戦）」において、どのようなコンドームアウトリーチが有効なのかを検討することを目的とした。

【方法】本調査ではハッテン場利用者 20 名に施設利用時における HIV 感染予防行動と、それに関連する要因についてインタビューを実施した。インタビューは書面による承諾を得た後、録音とメモにより記録された。記録データはテキスト化し、分析された。テキスト分析に当たっては「M-GTA（修正版グラウンディッド･セオリー･アプローチ）」（木下康仁『グラウンディッド･セオリー･アプローチ』2000）と、当該方法論をさらに実用化した「SCQRM（構造構成的質的研究法）」（西條剛央『質的研究とは何か』2008）に、マイノリティに関するテキスト分析法として 70 年代以降世界的に用いられている「ポスト構造主義」「社会構築主義」に則った言説分析法（ミシェル・フーコー『知の考古学』1970）（赤川学『セクシュアリティの歴史社会学』1999）を併せて用いた。テキストは切片化せずに文脈を損なわずに概念化され、概念間の構造が探索された。

【結果】ハッテン場におけるコンドーム使用の阻害要因に関する分析を進める中で、利用者が既に「コンドームの重要性に関する情報」を持っており、かつコンドームに対して「強い使用意図」がありながらも、実際のセックスの場面で「相手から不使用を提案」されると、その提案を「受け入れる」という概念構造が顕著に見られた。またこの時一方で「不使用の提案」を「拒否

する」との概念構造も同時に存在したため、分析の焦点を「不使用の提案」を「受け入れる」場合と「拒否する」場合の二つの概念構造を分かつポイントとした。その結果「コンドーム不使用の提案」はHIVネガティブの文脈では「相手もネガティブである」との理解のもとで「受け入れ」られ、HIVポジティブの文脈では「相手もポジティブである」という理解の下で「受け入れ」られるという概念構造が明らかとなった。これらの判断は、ハッテン場という非言語的状況下、とりわけ当人の期待的予期により主観的に解釈され判断される。期待的予期の背景には楽観やリアリティの欠如がある。その結果ハッテン場においてセックスの相手が表象する非言語的な記号性（しぐさや振る舞い、態度）などは、期待的予期によって、常に状況的に（当人に都合よく）解釈され理解される。その解釈が予防の観点から客観的に妥当しないことを当人は十分に理解しており、時にその意識がセックスの後の後悔や検査行動に結びつく。予防プログラムを立案する上で、概念構造から浮かび上がってくる最大のポイントは「不使用の提案」がなされる瞬間にある。ハッテン場においては、コンドームの重要性や予防の重要性、あるいはその方法が脆弱ではあれ規範となって全体化している。その規範は「不使用の提案」が無ければ破られない。「不使用の提案」がコンドーム不使用のトリガーとなっている点が重要である。「不使用の提案」という他者からのアクションがトリガーとなる背景には、「自らのアクションにより他者に感染を広げたくない」との思いがある。このような思いは、ポジティブであれ、（日常的にセックスがある以上 100%ネガティブという現実があり得ないという意味で）ネガティブであれ広く基盤的に存在している。これはコミュニティの規範とも言い得るものである。

【考察】「楽観」を「現実」へと引き戻したり、HIV 感染に対する「リアリティ」を獲得することは容易ではない。それらを実現するプログラムも必要であるし、それらは様々なコミュニティ規範を変えるプログラムによって時間をかけて実現してゆく必要がある。一方本研究で明らかとなった「不使用の提案」がコンドーム不使用のトリガーとなっているというポイントは、セックスの現場の環境を変えたり、メッセージの発信の仕方によって「コンドーム不使用」が「使用」へと変わる可能性を示唆している。先にも述べたがハッテン場においては、コンドームの重要性や予防の重要性、あるいはその方法が脆弱ではあれ規範となって全体化している。その規範を破る「提案」は、期待的予期によって受け入れられる。この状況は換言すれば「コンドーム不使用を提案する理由を、常に、しかも他律的に（他者や環境の中に）探している」状況であるとも言える。「近くにコンドームがない」「相手がコンドームを持っていない」「暗くて見えない」「コンドームを着けると痛い」「コンドームが外れてしまった」といった事柄が、コンドーム不使用提案のきっかけとなる。一度提案されてしまうと、双方に期待的予期があった場合コンドーム不使用へと至る。この場合「コンドームを使わなかった理由・根拠」は常に他者に預託される。「自らのアクションにより他者に感染を広げたくない」という規範が強固である中で、「主体的なコンドーム不使用」は存在せず、不使用は常に他者や環境にその原因が預けられる。ここからは、徹底した環境の整備が重要であることがわかる。環境の整備に際してはそもそも「コンドーム不使用を期待」する背景として、コンドームによる「性感の低下」や「扱いにくさ」といった点が表明されることを考慮する必要がある。コンドームをサイズや素材で選

択できること、品質の高いコンドームやローションを備えること、といった環境の整備が検討される必要がある。それによって「コンドーム不使用を提案する理由が、他者や環境の中に見つからない」状況を実現する必要がある。

D.考察

年度初頭に掲げた研究計画の項目にそって、研究事業の実施状況を［研究事業の実施状況まとめ］としてF.の後ろで総括する。

E.結論

1. プログラムはおおむね計画通りに継続された。コミュニティペーパーは内容的にモデルチェンジを果たしたが、その効果評価は来年度クラブ調査の結果を待たなければならない。中高年層への情報発信においてニーズが確認され、それに応えることが期待されている。STI 勉強会は次の展開を狙う位置にある。ドロップインセンターでは相談業務に進展がみられた。
2. ハッテン場への予防介入プログラムに大幅な進展がみられた。15軒の商業施設に対し3ヵ月という比較的短期間に6万個弱のコンドームパックを集中的に配布した。その効果評価はやはり来年度クラブ調査の結果を待たなければならない。
3. 発足当初からMASH大阪は大阪府と緊密な連携を取りながら事業展開を行ってきた（STI 勉強会の事業委託）が、本年度に大阪府がエイズ対策基本方針の改訂に着手し、その作業にMASH大阪が協力しつつある。来年度に向け、連携がさらに深まることが期待される。
4. 大阪地域においては薬物依存症を持つ MSMのあいだにHIV感染が拡がりつつあることが確認されている。こうした情況に対処するため、薬物依存者支援のCBOとの連携が進展、ドロップインセンターで関連のプログラムが定期的に開催されるに至った。

F.発表論文等

（研究論文）

1) 市川誠一、木村博和、鬼塚哲郎、松原新、佐藤未光、井戸田一朗：MASHによる啓発活動，総合臨床，50：2805-2810，2001.
2) 鬼塚哲郎：ゲイコミュニティへの予防介入事業，その現状と課題，日本エイズ学会誌，第６巻，第３号：141-144，2004.
3) 鬼塚哲郎、辻宏幸：MASH大阪によるゲイコミュニティ向けHIV/STI予防活動，保健師ジャーナル,第61巻,第2号:184-188,2005.
4) 金子典代、市川誠一、辻宏幸、後藤大輔、塩野徳史、鬼塚哲郎：健康教育ツールを開発しよう，計画②ツールを使えるものにするための最後の押さえどころ-MASH大阪による健康教育資材の紹介，保健師ジャーナル,2007,63巻12号,1142-1149.
5) 金子典代、市川誠一、辻宏幸、鬼塚哲郎：健康教育ツールを開発しよう、計画③対象者にひびくメッセージをつくろう、保健師ジャーナル，2008,64巻1号,82-89.
6) 鬼塚哲郎、山田創平：感染に脆弱な集団にどう予防介入するか～マイノリティ集団における一次予防、二次予防、三次予防のあり方を検証する，治療学，vol.42-no.5，2008.

（国内学会発表）

1) 山田創平、鬼塚哲郎、辻弘幸、後藤大輔、鍵田いずみ、内田優、町登志雄、塩野徳史、市川誠一：商業施設を利用するMSM(Men who have Sex with Men)向けHIV感染予防プログラムの開発に関する形成的研究，第23回日本エイズ学会学術集会・総会，2009年11月26日.
2) 鬼塚哲郎、佐藤知久、鬼塚哲郎、西真如、山田創平、藤田淳志、竹田恵子：HIV感染対策研究における人文学の応用可能性，

第23回日本エイズ学会学術集会・総会 2009年11月27日.

（国際学会発表）

1) Background & gay NGO responses, Onitsuka T, Koerner J, Kaneko N, Ichikawa S: The HIV/AIDS epidemic among MSM in Japan, Satellite Symposium on HIV infection in developed east and south-east Asia, ICAAP Bali, 11 Aug 2009.
2) Onitsuka T, Koerner J, Kaneko N, Tsuji H, Goto D, Cho Y, Shiono S, Uchida S, Takenaka M, Ichikawa S: HIV infection rates, risk & preventive behaviors of MSM in Asia, How does Japan compare?, poster presentation, ICAAP Bali, 10 Aug 2009.
3) Onitsuka T, Koerner J, Kaneko N, Yamada S, Shiono S, Tsuji H, Goto D, Machi T, Omori S, Kimura H, Ichikawa S: HIV risk & sexual behaviors of Middle Aged MSM: Findings from the 2007 Osaka bar survey, poster presentation, ICAAP Bali, 10 Aug 2009.

[研究事業の実施状況まとめ]

プログラム関連の事業継続	ドロップインセンターdista	計画通りに執行されたが、利用者の増加は前年度に比べ微増にとどまった 相談業務に進展がみられた
	コミュニティペーパーSaL+の事業継続	計画通りに執行された
	若年層のネットワーク育成 Step の事業継続	計画通りに執行された
	STI 勉強会 Café Chat の事業継続	前年度獲得されたレベルが質・量ともに維持された
	ハッテン場プロジェクト	オーナーへのヒアリングに基づき、コンドーム配布プログラムを執行した
アウトリーチ関連	新たな商業施設との連携	新世界地区での新規開拓が課題として残った
アドボカシイ関連の事業継続	行政との協働事業の展開	地方自治体（大阪府）との連携に新たな展開がみられた
	CBO との連携事業の展開	薬物依存関連 CBO との連携が進展した
研究関連	プログラムの効果評価	2007 年度に引き続きゲイバー利用者調査（バー精密調査）が実施された
学会等での情報発信	The 9th ICAAP	・サテライトシンポジウムにおいてシンポジストを務めた ・ポスターセッションにおける演題発表（２題）を行った
	日本エイズ学会	・演題発表（１題）を行った ・MSM 関連シンポジウムを企画・運営した ・展示ブースを設置し、会員に対し情報発信を行った

【付表 1：SaL+配布実績- 2009 年度（12 月末時点)】

期間	配布された施設 (昨年度の数値)	送付団体・個人 (昨年度の数値)	配布された部数 (昨年度の数値)	配布スタッフ延べ数 (昨年度の数値)
2009 年 4 月	185 店舗(195 店舗)	38 団体（33 団体)	6503 部(6733 部)	18 名(23 名)
2009 年 5 月	185 店舗(195 店舗)	38 団体（32 団体)	6418 部(6808 部)	20 名(20 名)
2009 年 6 月	186 店舗(189 店舗)	37 団体（34 団体)	6613 部(6893 部)	19 名(22 名)
2009 年 7 月	186 店舗(190 店舗)	38 団体（35 団体)	6668 部(6720 部)	25 名(17 名)
2009 年 8 月	190 店舗(192 店舗)	37 団体（35 団体)	6393 部(7770 部)	16 名(20 名)
2009 年 9 月	187 店舗(192 店舗)	118 団体（36 団体)	7140 部(7760 部)	26 名(37 名)
2009 年 10 月	186 店舗(190 店舗)	37 団体（35 団体)	6533 部(6680 部)	28 名(18 名)
2009 年 11 月	186 店舗(191 店舗)	39 団体（36 団体)	6563 部(6620 部)	20 名(18 名)
2009 年 12 月	186 店舗(190 店舗)	40 団体（37 団体)	7008 部(6595 部)	15 名(7 名)
2010 年 1 月	187 店舗(188 店舗)	39 団体（37 団体)	6588 部(6593 部)	18 名(19 名)
2010 年 2 月	店舗(188 店舗)	団体（37 団体)	部(6588 部)	名(16 名)
2010 年 3 月	店舗(188 店舗)	団体（37 団体)	部(6603 部)	名(20 名)
2009 年 4 月～ 2010 年 1 月	月平均 186 店舗	月平均 38 団体 ＊9 月を除外	月平均 6643 部 合計 66427 部	月平均 21 名 合計 187 名

【付表 2：dista 利用者状況- 2009 年度（1 月末時点）】

期間	MASH 大阪 業務来場者	イベント来場者 (うち初来場者)	ふらっと来た人 (うち初来場者)	来場者総合計 (うち初来場者)	稼働時間
2009 年 4 月	74 名	163 名（23 名)	515 名（51 名)	752 名（74 名)	188.5 時間
5 月	106 名	253 名（38 名)	672 名（75 名)	1031 名（113 名)	223.0 時間
6 月	86 名	101 名（06 名)	499 名（21 名)	686 名（27 名)	180.0 時間
7 月	82 名	117 名（08 名)	517 名（46 名)	716 名（54 名)	192.0 時間
8 月	96 名	159 名（43 名)	622 名（71 名)	877 名（116 名)	194.0 時間
9 月	159 名	111 名（18 名)	505 名（48 名)	775 名（81 名)	188.5 時間
10 月	197 名	198 名（34 名)	709 名（108 名)	1104 名（157 名)	189.0 時間
11 月	92 名	185 名（26 名)	572 名（45 名)	849 名（72 名)	196.0 時間
12 月	55 名	151 名（15 名)	483 名（31 名)	689 名（48 名)	184.0 時間
1 月	36 名	178 名（40 名)	528 名（58 名)	742 名（98 名)	150.0 時間
2 月	60 名	171 名（09 名)	587 名（71 名)	818 名（81 名)	139.0 時間
3 月	名	名（　名)	名（　名)	名（　名)	時間
年度合計	1043 名	1797 名（290 名)	6219 名（625 名)	9039 名（921 名)	2024.0 時間
月平均	94.8 名	163.3 名(26.3 名)	565.3 名(56.8 名)	821.7 名(83.7 名)	184 時間

【付表3：dista利用者数年度別推移- 2009年度（2010年1月末現在）】

年度	合計	月平均
2003 年度（平成 15 年度)	3436 人	286.3 人
2004 年度（平成 16 年度)	5910 人	492.5 人
2005 年度（平成 17 年度)	6187 人	515.5 人
2006 年度（平成 18 年度)	8402 人	700.2 人
2007 年度（平成 19 年度)	9377 人	781.4 人
2008 年度（平成 20 年度)	9665 人	805.4 人
2009 年度（平成 21 年度) 2 月末現在	9039 人	821.7 人

【付表 4：dista カフェイベントの実施内容一覧- 2009 年度（2010 年 1 月末現在）】

イベント名	イベント・教室の内容
Alt Café	陽性者、または陽性者の家族や近親者を対象にしたクローズド形式の親睦カフェ。月 1 回、第 2 土曜日の昼間に開催
Café CHAT	SEX について、STI についてのトークを織り交ぜ、参加者に自らの SEX を振り返ってもらい、STI の予防を促進させる。月 1 回、第 2 土曜に開催
Salon de ONI	ワインを楽しみながら、年齢層の高い人も交えてじっくり深い話が出来る空間を提供する。月 1 回、第 4 土曜日に開催。
レインボーアディクションミーティング	LGBT の人たち向けの様々なアディクションからの解放と回復を目的としたグループミーティング。毎月第 4 木曜日に開催。
東方美男	中国茶やスイーツを手軽に楽しみながら、来場者同士でじっくり話の出来る空間を提供する。隔月 1 回、第 1 土曜日に開催。
CAMP!	映画を素材として、参加者と主催者でセクシャルマイノリティに関する話題を展開していくイベント。3 ヶ月に 1 回開催。
Café LINK	日本酒を楽しみながらのんびりと語り明かし、参加者同士で交流を深める。不定期開催。
Café SMILE	dista 初心者でも楽しめるように、遊びの要素を詰め込んだカフェイベント。不定期開催。
STEP	10 代、20 代のゲイ向けの友達作りサークル。季節に合った場所に遊びに出かけ、交流を深める。不定期開催。
distage	イベントや DJ をやりたい人達に人脈を広げてもらうことを目的にした新人発掘、育成イベント。不定期開催。
bruit branc	音楽を通して dista の認知度を広げるとともにネットワークの構築を図る。不定期開催。
SANKAKU▼喪苦罵	音楽を「聴く」楽しみだけでなく、「演奏」する「セッション」するという楽しみ方を提供。不定期開催。
Café Sweets Time	主催者が作ったお菓子とお茶を楽しみながら参加者とスタッフが交流し、ネットワークを広げる。単発企画。
Lounge Nami	ＤＪ＋ドラァグクイーン＋映像によるインスタレーション形式のイベント。ラウンジをコンセプトに、ゆっくり出来る場を提供。単発企画
恋に恋する世代	「恋愛とは何か?」をコンセプトにしたトーキングスナック。飲み物を肴に会話を楽しむ。単発企画。
and more…	深夜ならではのモノづくりを通じて STI に興味を持ってもらう事を目的とした Café CHAT,アトリエＰとのコラボイベント。単発企画。
教室名	
二般ハングル教室	Gay のための韓国語会話教室。教室以外にも温泉旅行に韓国旅行など、メンバーの親睦も図るイベントも行う。隔週水曜、金曜に開催。
Sign-手話教室-	セクシャルマイノリティ対象の手話教室。日本手話でろう者と日常的な会話が出来るようになる事を目的としている。隔週金曜日に開催。
4Q アロマ教室	性別を問わず、もっと身近にアロマセラピーを楽しんでもらうための教室。毎月第 4 木曜日開催。
アートワークショップ　アトリエＰ	様々な画材を使って自由にモノ作りをすることを通して参加者にリフレッシュしてもらい、交流してもらうオープンスタイルのワークショップ。毎月第 3 木曜開催。
たいがーりりぃ	性的マイノリティやセックスワーカーに関する問題を、毎回違うテーマに沿って話しあう対話イベント。毎月第 1 木曜日開催。

【付表 5：dista 展覧会の実施内容一覧- 2009 年度（2010 年 1 月末現在）】

タイトル	アーティスト	期間	来場者数
大漁鰆展　大阪編	四聖 鰆	8 月 8 日～8 月 24 日	56 名
オペラグラフィカ “赤ずきんとオオカミ” ～Little Red Food Who Loved The Wolf～	オナン・スペルマーメイド シモーヌ深雪	9 月 19 日～10 月 3 日	55 名
市川和秀個人展「色々天国」	市川 秀和	10 月 7 日～10 月 26 日	74 名
ARITA TADASU EXHIBITION	有田 匡	12 月 24 日～1 月 22 日	101 名

【付表 6：dista 相談件数の推移- 2009 年度（1 月末現在）】（電話相談・別目的での来場後に相談へ移行したものを含む）

年度＼月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	合計	月平均
2004 年度	1 件	3 件	4 件	3 件	0 件	1 件	0 件	0 件	0 件	3 件	3 件	0 件	18 件	1.5 件
2005 年度	2 件	2 件	0 件	4 件	1 件	5 件	1 件	1 件	1 件	1 件	0 件	1 件	19 件	1.6 件
2006 年度	6 件	10 件	4 件	0 件	1 件	7 件	1 件	3 件	3 件	6 件	3 件	5 件	49 件	4.0 件
2007 年度	5 件	7 件	23 件	15 件	9 件	7 件	19 件	5 件	5 件	0 件	0 件	2 件	97 件	8.1 件
2008 年度	19 件	10 件	19 件	18 件	20 件	19 件	21 件	32 件	18 件	23 件	20 件	27 件	246 件	20.5 件
2009 年度	10 件	31 件	16 件	26 件	14 件	28 件	19 件	27 件	21 件	33 件			1 月迄 225 件	1 月迄 22.5 件

【付表 7：dista 相談内容の状況- 2009 年度（1 月末現在）】

相談内容（複数チェック）	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	年間合計
HIV 感染不安				2	1	3	1	3	2	1			13
STI 感染不安		1		2	1	3	1	2	1	1			12
HIV 検査に関する相談／報告	1			2				4	3				10
STI 検査に関する相談／報告				2				2	1				5
エイズに関する一般的な質問	1	1		2	1	1	1	4	1	6			18
HIV+としての生活／制度など		2	3	4					1				10
HIV+支援について	1	1		1					1				4
相談機関紹介		1				1	1	3	2				8
LGBT 団体、ネットワーク紹介		1		2		2	1	1	1	1			9
店舗情報紹介		1					3			2			6
パートナーとの関係について	1	1			1	1			1	2			7
家族との関係について	1	5	1		2	1			1	1			11
結婚について	1												1
進学・仕事・就職について	1	3	3	2	1	1		1		3			15
金銭問題・経済的な不安／問題		2	3		1	1				1			8
将来についての不安	1				1	3				1			6
シニアとしての生活不安										2			2
恋愛相談		1		1				1		1			4
精神的不安	1	5	3		3	2	2		1	1			18
アイデンティティ、カミングアウト		1		2		2	1	1		2			9
薬物使用について		2							1				3
薬物依存からの回復について		1	3	3	1	3	5	3	2	4			25
医療機関への緊急搬送支援													0
口腔ケアその他健康管理													0
研究デザイン・論文等について					1	1	1		1	2			6
医療相談								1					1
NPO/CBO 組織運営について						1	1		1	2			5
その他	1	2		1		2	1	1					8
合計	10	31	16	26	14	28	19	27	21	33			225

【付表8：distaスタッフ研修プログラムの内容―2009年度　2010年1月末現在】

開催日	テーマ	参加者数
2009年6月	「HIV/STIの基礎知識」 HIV/STIの基礎知識について現時点でどのくらい理解しているかについてのテストを行い、足りないスキルや必要な知識の確認、共有を行った。	6名
7月	「セクシャルヘルスとは何か?」 講師：鬼塚哲郎（MASH大阪）、辻宏幸（MASH大阪）、山田創平（MASH大阪） WHOによる「健康」の定義をもとにセクシュアルヘルスとは何かについてグループワークを行い、その後全体で共有した。	17名
8月	「対人支援の基礎」 講師：仲倉高広さん（国立大阪医療センター／臨床心理士） 医療機関における HIV 相談の現状を学び、医療機関とＣＢＯそれぞれにおける対人支援のあり方について、意見交換を行った。	16名
9月	「対象の多様性シリーズ（1）SW、外国人、TGなど」 講師：鍵田いずみ（MASH大阪） セックスワーカー、外国籍住民、トランスジェンダー等の対称層について基礎知識を学び、HIV/エイズについてそれぞれ固有の課題と紹介できるリソースについてグループワークと共有を行った。	11名
10月	「HIV治療と福祉制度」 講師：岡本学さん（国立大阪医療センター／ソーシャルワーカー） HIV治療と日本の医療制度の実際について学び、医療機関におけるソーシャルワーカーの役割とCBOの連携のあり方について考えた。	15名
11月	「対象の多様性シリーズ（2）依存症とHIV/AIDS」 講師：倉田めばさん（大阪ダルク） 依存症の基礎知識とダルクの活動について学び、倉田さんやスタッフの体験談をもとに、薬物依存症とHIVについての支援のあり方について考えた。	13名
12月	「HIV検査から支援まで」 講師：岳中美江さん（CHARM、陽性者サポートプロジェクト関西） 検査体制の実状と支援について学び、これから検査を受ける人から結果を受け取った人までを含めた包括的な支援はどうあるべきか、また予防・検査・支援を担当するそ各のセクターの連携などについて考えた。	11名
1月	「日常の健康管理を含む「セーファーセックス」の基礎知識を対人援助として伝えるスキル 講師：内田優（MASH大阪）、中村祐子（MASH大阪）	7名
2月	「コミュニティとの協働」 講師：鬼塚哲郎（MASH大阪）、辻宏幸（MASH大阪）、町トシオ（MASH大阪）	12名
3月	「振り返りと評価」 講師：内田優（MASH大阪）、辻宏幸（MASH大阪）	12名

【付表 9　Cafe Chat プログラム実施状況- 2010 年 1 月末現在】

開催日	企画タイトル	参加者数 (新規参加者)	内容
2009 年 1 月	「ゲイ春！セックスカルタ会 2009」	8 名（2 名）	ゲイのセックスや恋愛、性感染症などについての歌が書かれたカルタを参加者で取り合い、詠まれたカルタに書かれている事柄について解説したり、意見交換を行った。使用資材◆カルタカード
2 月	「セックスクエスチョン」	7 名（2 名）	セックスに関する疑問や質問を事前に dista 来場者から募ったものと当日の参加者からも募ったものをもとに意見交換を行った。セーファーセックスに関する疑問、質問を取り上げることで、参加者への意識喚起につなげた。使用資材◆投稿文形式の質問カード
3 月	「HIV LIFE」	26 名（1 名）	equal partner project 主催の「＋－＝○」を dista で展示していたため、それをゆっくり観覧し談話できる雰囲気を意識したカフェイベントを開催した。自分にとっての HIV や陽性者の存在、また感染することについて考える機会となることを意図した。
4 月	「コンドームフェア」	54 名（10 名）	お花見企画の一環として、dista に来場した参加者に向けてコンドームの展示や解説を中心としてカフェイベントを開催した。多種多様なコンドームを展示し、実際に触れることでコンドームへの興味と親密度を高めることを意図した。使用資材◆20 種以上のコンドーム
5 月	「初めての○○」 STI 勉強会 「検査について」	9 名（4 名）	初ゲイタウンや初セックス、初恋などと書かれたサイコロを振り、出た目の内容について発表し、意見交換を行った。自身の体験の振り返りや他者の意見を聞く機会となった。STI 勉強会◆資材をものに検査場の案内や検査の内容等検査関連の基礎情報の解説を行った。使用資材◆初体験サイコロ、検査関連資材
6 月	「KISS☆キス☆接吻」 STI 勉強会 「オーラルケア」	7 名（3 名）	印象深いキスやキスの種類、キスのテクニックなどキスについての体験や考えを意見交換した。STI 勉強会◆キスに関連してオーラルケアについて意見交換をした。歯周病や口臭、口腔内に感染する性感染症についてなど適宜解説をした。
7 月	「求めて☆求められて-SEX 編-」 STI 勉強会 「Safer Sex」	7 名（3 名）	SEX をする相手に対して、求めること、求められたいことについて意見交換を行った。STI 勉強会◆Safer Sex を意識する上において求めたいこと、求められたいことについて意見交換を行った。自身の Safer Sex について振り返り、またそれを相手と共有することをイメージする機会とした。
8 月	「見せるエロ・隠すエロ」 STI 勉強会 「感染経路ってナニ？」	6 名（3 名）	人体図をもとに、見えているからこそ、もしくは見えていないかこそよりエロスが際立つ体の部位や特徴についての意見交換を行った。STI 勉強会◆人体図に感染経路と考えられる部位をチェックしてもらい、参加者にどんな症状や事例が考えられるかを発表してもらい、適宜解説を行った。使用資材◆人体図
9 月	「突っ込め！突っ込まれ☆SEX クエスチョン」 STI 勉強会 「コンドームイロイロ」	6 名（4 名）	多種類のコンドームの山の中にセックスに関する疑問や質問を記載したカードを散りばめて、そのカードの内容をもとに意見交換を行った。また質問カードの中にコンドームに関するものを入れておき、コンドームの話題へとつなげた。使用資材◆20 種以上のコンドーム、質問カード
10 月	「PLuS+2009 展示～SEX CHAT～」	約 150 名	恋人探しや SEX 時に“気になる”ことを広義にまとめ、それと STI に関する事柄とを絡めたテキストシート展示し、観覧者からコメントを寄せてもらった。それについて意見交換をし、了解を得て展示した。使用資材◆展示パネル、コメント記載用シート
11 月	「スポーツの秋、SEX の秋」 STI 勉強会 「ずばりアナルセックス」	9 名（4 名）	「するのが好きなスポーツ」と「イケルスポーツ」を参加者それぞれから挙げてもらい、意見交換を行った。STI 勉強会◆肛門から S 字結腸まで書かれた図をもとに、アナルセックスにまつわるプレイや STI についての意見交換と解説を行った。
12 月	「クリスマスデート」 「エロ川柳歌詠み会」	7 名（4 名）	SEX をするということを前提としたクリスマスデートというテーマでデートプランを参加者其々に立ててもらい意見交換を行った。その後、翌月のカルタ会で使用するカルタの歌詠み会を翌朝まで実施した。使用資材◆プラン記入シート、川柳記入用紙
2010 年 1 月	「ゲイ春！ セックスカルタ会 2010☆」	7 名（4 名）	ゲイのセックスにまつわる内容のカルタ取りを行い、上位３名を表彰した。また先月行った歌詠み会から優秀作品を選出し、それを新作カルタに組み込んだ。特に優秀な歌人を表彰した。

【表10：step企画実施状況- 2009年度（2010年1月末時点）】

時期	企画	参加者			参加者の dista への来場			Mixi コミュニティ登録者数
		合計	内訳		合計	内訳		
			step 初参加	参加経験あり		新規来場者	リピーター	
4 月	お花見 step	64 名	36 名	28 名	50 名	28 名	22 名	313 名
6 月	バス step	13 名	6 名	7 名	9 名	0 名	9 名	313 名
7 月	スパ step	10 名	0 名	10 名	10 名	0 名	10 名	316 名
8 月	超 step	30 名	15 名	15 名	30 名	15 名	15 名	318 名
合計		117 名	57 名	60 名	99 名	43 名	56 名	

【表 11：step から他のプログラムへの接触状況- 2009 年度（2010 年 1 月末時点）】

アウトリーチへの参加	7 名
SaL+への参加	1 名
Café CHAT へ参加	3 名
dista コンシェルジュへの参加	0 名
Community space dista へ新規来場	43 名
PLuS+2009 ボランティア	10 名
合計	64 名

【表 12：ハッテン場プロジェクト～β～コンドーム＆ローション供給プログラム実施状況- 2009 年度（第 1 回）】

	地区	施設名	施設分類	1ヶ月供給量	期間供給量合計
1	堂山	施設 A	サウナ系	5000 パック	15000 パック
2		施設 B	サウナ系	3200 パック	9600 パック
3		施設 C	ヤリ部屋系	1200 パック	3600 パック
4		施設 D	ヤリ部屋系	1000 パック	3000 パック
5		施設 E	ヤリ部屋系	800 パック	2400 パック
6		施設 F	ヤリ部屋系	800 パック	2400 パック
7		施設 G	ビデオボックス系	400 パック	1200 パック
8		施設 H	ビデオボックス系	400 パック	1200 パック
9	ミナミ	施設 I	ヤリ部屋系	600 パック	1800 パック
10		施設 J	ヤリ部屋系	200 パック	600 パック
11		施設 K	ビデオボックス系	200 パック	600 パック
12	新世界	施設 L	サウナ系	3200 パック	9600 パック
13		施設 M	サウナ系	1200 パック	3600 パック
14		施設 N	サウナ系（ヤリ部屋系）	1000 パック	3000 パック
15	京橋	施設 O	ビデオボックス系	400 パック	1200 パック
15 店舗				19600 パック	58800 パック